

「インターネットの世界にはもうひとつの地球がある」と表現したのは『ウェブ進化論』（ちくま書房）の著者、梅田望夫さんである。現在、40歳代半ば、中学生であった当時、いつも頭の中にコンピュータがあったという。それから30年、彼は今、インターネットのメッカ、シリコンバレーに暮らしている。

「グーグル・アース」に代表されるように、インターネットを介して、仮想の地球儀から世界の隅々まで覗き込め、あらゆる事項を一瞬で検索できる時代となった。あらかたの知識や情報はネットで得られる時代になり、また、利用者もネットを介して最新の情報を書き込めるといふ時代に入ったといふよい。

あと10年ほどであらゆる文字情報がデジタル化され、インターネット上の図書館には、すべての文献が閲覧可能になるという。インターネットで検索して存在しないものは、地球上にはないという時代がすぐそこに来ている。こんな時代に今の子どもたちは生きている。もう一つの地球では「インターネット」と呼ばれる乗り物をほぼ無料で使用できると考えてよいだろう。その地球を旅する子どもたちに「どのような教育的な視点で指導すればよいか？」が、今、まさに問われている。旅の途中には、子どもたちを誘惑するあらゆるものが潜み、隙あらば…虎視眈々と悪魔た

ちが待ち構えていることも確かである。だからといって「インターネット」を必要以上に警戒する必要もないし、完全に子どもたちから遠ざけるべきものではない。少なくとも、その利点、危険性、限界を学校・教員自身が正しく理解し、教室や校内で正しく指導することが、今、必要である。また、インターネットの情報には「玉石混交」であることも知っておく必要がある。ひとつのサイトでわかった情報をすぐに鵜呑みにせず、他のサイトなども調べる習慣をつけることも必要である。違う記述があれば、引用する際「意見の違うことがいくつか書いてあったが、私はこうだと思う」式の解釈を持つ訓練も必要だ。また、「インターネット」を利用する際の子どもたちへの指導と見守りは学校だけではなく、家庭でも大いに担ってほしい。

最近、学校現場では、ある時期までインターネットには接続せず、独立したコンピュータ（「スタンド・アローン」と呼ぶ）でコンピュータ・リテラシーを学ばせるべきであるという意見が趨勢を占めつつある。もちろんそこではワードなどの基本ソフトはその必要はない。「インターネット」を使う授業が「小・中学段階のどこで必要か？」など、慎重に吟味すべきである。たとえ小人数の生徒であっても、教室では一人の教員がすべての閲覧行為を監視することは不可能である。教員と生徒との信頼関係が確立して初めて、目的の授業ができる。今まで人類が経験し得なかった素晴らしい「もう一つの地球」との出会いがすぐそこにやって来た。正しい出会いに導く教育者の役割は非常に大きい。

